法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

十九世紀末のわが社会主義 : 郭沫若先生の一指摘への関説

ハセガワ, ヒロシ / 長谷川, 博 / HASEGAWA, Hiroshi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社會勞働研究
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
109
(終了ページ / End Page)
124
(発行年 / Year)
1956-12-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00017427

十九世紀末のわが社会主義

――郭沫若先生の一指摘への関説――

長谷川　博

一

昨年十二月、中華人民共和国訪日科学代表団が来訪、中日学術文化の交流のため、両国友好強化のために、全国各地で種々の会合がもたれた。茗渓会館における八団体主催の歓迎会や歴史関係六学会主催の討論会に出席し、さらには代表団による「東京会館挙行辞行宴会」への招待をうけたが、その際に得た感銘はまことに深いものがあり、まだ昨日のことのように想起される。

しかし、そのさいの感想や評価は、すでに多くの人々によって発表されており、今日あらためてまた、それをしようというわけではない。わたしは、郭沫若先生と南原繁先生とが当時された対談が、「十八年ぶりの日本」として、中央公論の本年二月に掲載されている、そのなかで郭先生が指摘されている点について、その後まだ触れたものを見ないので、そのことについてのみ些か関説したいと思う。

「もう一つおもしろいことを申上げましょうか。一九一三年(註1)出版で、お国の福井準造という人の書いた『近代社会主義』(註2)という四巻になっている本が、私どもの方に翻訳されたのです。私どもの方で、マルクス、エンゲルスを知ったのは、この本によって知ったのです。この本はごく簡単ですけれどもマルクス、エンゲルスの科学的社会主義のことを述べて、それ以前のはユートピアの社会主義だということを書いているのです。だから文献の上では、これが一番古いということなんです。ですから私どもがマルクス、エンゲルスを知るようになっ

たのは、やはりお国の紹介によったということなんです(笑)。ところが、お国の人は福井準造氏は知らない、「それは貴方が間違っている、福田徳三だろう」というのですが、そうじゃない。福井準造なんですよ(笑)。お国の社会主義者たちは、おそらくこのことには気がつかないと思います。」

(註1) 一九一三年とあるは、もちろん一九〇三年のミスプリントである。

(註2) 趙必振訳「近世之社会主義」

右の話のなかから、わたしは二つの点をとりあげたい。第一は、福井準造の著書「近世社会主義」の中国訳「近世之社会主義」が、「文献上では一番古く」中国にマルクス、エンゲルスとその科学的社会主義を紹介したという点、第二は、「お国の人は、福井準造を知らない」、「お国の社会主義者たちは、おそらくこのことに気がつかないだろう」とあるが、それは何故かの二点である。

二

第一点についても、郭沫若(以下敬称略)の言に検討を加えようなどというのではない。郭沫若が日本では中国研究家、あるいは歴史家、労働運動史家というような人々でもなければ(註3)、知らないであろう福井準造著「近世社会主義」(訳「近世之社会主義」)をとりあげられたのは、中日文化交流の歴史的伝統を強調しようとされたものとおもわれ、興味ふかいことである。それ故、わたしは些か補足的な説明をしようとおもうのである。

(註3) これらの人々は、近くは、一九五二年「新建設」の栄孟源「辛該革命前の中国の出版物にあらわれたマルクス主義」を見るか、少くとも一九五四年二月中国「歴史研究」の黎澍「社会主義の中国における伝播を論ず」によって、または、前者の抄訳(一九五四年八月日本「歴史研究」)によって知っていたとおもう。

さて、一九〇〇年の義和団農民革命から一九〇五年のロシアの第一革命までの中国における社会主義は、康有為や梁啓超らのブルジョア立憲派(社会改良派)と孫中山を先頭とするブルジョア革命派の二つの主潮があった。問題の書の中国訳はこの時期に前者によって出されている。

康有為の当時の思想は、「大同書」(一八八四年)にみられるように、空想的社会主義とブルジョア民主主義、さらに儒教の政治思想の混合であり、またその弟子梁啓超の思想は、「中国之社会主義」(一九〇三年)にみられるように、マルクスの学説は、中国にも古くからあった、古代の井田制度のごときは、近世社会主義の同一立脚点にたつものである、という程のものであった。彼らは当時、啓蒙学者として非常な影響力をもち、満清政府に対して立憲制を要求して闘うブルジョア的改良派を叫合していた。彼らは「社会主義」に対しては、反対の立場をとるというより、むしろこれを讃えることによって、義和団事件後の愛国運動と革命運動を自らの改良主義的路線へ導こうとしていた。それ故、福井

準造著の前掲書や、村井知至著「社会主義」(唐蟒訳)、および(註4)パンフレット「社会党」等をつぎつぎに翻訳し、宣伝したのである。(註5)

(註4) これは、中国でも著者未詳であるらしい。訳書をみる機会がないが、西川光次郎著「社会党」(一九〇一年)か、皖世散史著「側面照射、社会党」(一九〇〇年)ではないかとおもうが、訳者が、ペンネームだから著者名を明かにしていないとすれば後者であろうか。

(註5) 「新民叢報」は、福井準造「近世之社会主義」を紹介し、次のようにいっている。「本書には中国の前途に関するものが二つある。一つは、中国では、将来文明が日に進み、工業が限りなく発達するが、労働者の問題の解決が大いにむつかしくなる。この書は欧米各国の労働問題の解決について最も詳しく、他日の参考とすることができる。

一つは、中国の党派の組織についてであるが、幼稚な時代には、主義主張が混淆し、目的が雑然としており、違った道にはいりやすい。特に社会党と無政府党とはまぎれやすく、混同されやすい。社会党といえば、もとより世界に歓迎されるものであるが、無政府党は世界に嫌悪される。この書はこれを最も詳しく分析しており、党派を語るものにその択ぶところをしらしめるものである」(歴研一七四号孟営源)

康有為、梁啓超らは、マルクス主義を「世界最高尚美妙之主義」だと一応はいいながらも、社会革命は欧米でも百年先きのことであり、土地革命は下層社会の広大な大衆を覚醒させ、起ちあがらせるから危険だというブルジョア的立場を固執していた。そして戊戌変法失敗後、両者は保皇党にてんらくし、ブルジョア・地主の代弁者となった。

他方、孫中山は、一九〇〇年の農民革命の失敗の経験に教えられて、康有為、梁啓超らの改良主義分子との妥協的態度を一擲し、とくに一九〇三年(在日中)には、清朝の君主制を除き、外国の侵略を排し、民主中国を建設して土地国有、あるいは地権を平均化するための、革命を将来しようとする断乎たる革命的立場をとるようになった。当時孫中山らは、革命の実現が可能であると考えたが、これを実現するのはブルジョアーであり、プロレタリアートではないと考えていたのである。「事実上、為梁啓超所反対的中山和「民報」少数的論家所謂社会主義并非馬克思主義、所主張的革命亦非社会主義革命」(黎澎著「近代史論叢」二五頁)。

かくて一九〇三年当時、「文献上」では空想的社会主義や無政府主義と羅列的にマルクス主義を紹介する役割を福井の書が果したことは事実である、がこれを理解し実践すべき主体は、発生していなかったのである。郭沫若が、とくに「文献的に」最も古くといっていられるのはこの故であろう。真に正しくマルクス主義が中国に伝播、生成したのはロシア十月革命直後のことである。その直接の代表的な担い手は李大釗であり、中国共産党であった。毛沢東主席は次のように説いている。

「中国人民找到馬克思主義、是経過俄国人介紹的。在十月革命以前、中国人不但不知道列寧、斯大林、也不知道馬克思、

恩格斯。十月革命一声砲響、給我們送来了馬克思列寧主義。」
（「論人民民主専政」五六頁）

三

次ぎに**第二の点**、「日本人は福井準造を知らない」という指摘。これに対してわたしは、何故福井準造が知られていないか、社会主義者すら福田徳三と混同する程、関心をはらっていないかについてのわたしの答えを述べてみようとおもう。われわれはまず、問題の書、「近世社会主義」とはどんな本であり、どんな評価をうけた、あるいは受くべき本であるかを考えてみよう。

「近世社会主義」（明治三十二年七月十六日有斐閣発行、菊判五二三頁）は、「自序」[註6]の外に、野村靖の題辞と栗原亮一の「序」（三十二年三月）をつけている。

（**註6**）この「自叙」は著者の著述目的従ってその立場を示している。後にふれる。

その内容は、フランスの社会主義（ベブーフ、カベー、オーエン、サンシモン、フーリエー、ルイブラン、プルードン）を第一篇、「第一期の社会主義」とし、ドイツの社会主義（マルクス〔一四九―一八四頁〕、国際労働者協会〔一八五―一九七頁〕、ロードベルタス、ラッサールを第二篇、「第二期の社会主義」としている。第三篇「近時の社会主義」としては、無政府主義、社会民主主義、国家社会主義、ビスマルクの社会主義、キリスト教社会主義を羅列し、第四篇「欧米諸国における社会党の現状」として英（附濠、新西蘭）仏、独、白、瑞、伊、墺、和、墺、匈、那、露（附西、葡）、米の各国社会党について述べている。附録として、年表と文献がある。

この構成および菊判五百頁を超す頁数からしても、当時の、このような主題の出版物としては詳細且つ広汎なこと、比類をみないものであったことは諒解されるであろう。

本書は、社会主義を第一期、第二期に区分し、「旧社会主義」「新社会主義」として、空想的社会主義と科学的社会主義とを明らかに区別し、その発展の内的連関はつかんでいないが、歴史的段階として把握、叙述している。この点は、わが国では、当時すでに民友社篇「現時社会主義」[註7]以来、社会主義の歴史として知られてはいたが、福井はイリーの「仏・独社会主義」に、イギリスの社会主義を加えて叙述することによって一層はっきりさせている。

（**註7**）イリー（又はイーリ Richard Theodore Ely 一八五四―一九四三年）は、その文献によって我が国の社会主義者には関係が深い人である。片山潜は「自伝」で次のように述べている。「予が社会問題に趣味を持つ様になったのは、何でもメリーヴィルにいる頃からである。此の時に予は「クリスチャン・ユニオン」（今の「アウトルック」）を読んでいたが、イリー教授がよく社会問題の事を書いた。予は非常に趣味を持って読んだ。すると予がグリンネル大学へ入学した年の暮れに、イリー博士は「ソーシャル・アスペクト・オブ・クリ

スチャニチー」とか云ふ一書を著した。予は読んで非常に面白く感じた、二三冊を買うて友人に与へた位である。此の時分のイリー博士は仲々大胆であった。自ら社会主義者を以て名乗りはせなかったが、主義者を以て自任している口調で書かれてあった。イリー博士は今のウイスコンシン大学へ行き、社会問題に趣味を持ち、しかも働労者に非常の同情を表はしたといふので大学理事が裁判沙汰にせんと云うたので、イリー博士はパンを奪はれては大変と思ったのか、それ以来猫の如く頭かくしになり風化したが、予の在学中は、実に社会主義や労働問題解決の紹介には熱心で雄弁であった」(「自伝」)

このキリスト教社会主義者たる著者は明治三十年代の多くのわが国社会主義者に影響を与へただけでなく、第一次大戦直後にも普通に公然と手にはいる社会主義書であったために多くの人々に読まれた。例えば野坂参三も学生時分はじめて読んだ社会主義文献がそれであると講演していられた。

南北戦争後一八七三年の恐慌を契機に物価騰貴、農村の恐慌失業等社会矛盾が深化した。そして Henry George. "Progress and Poverty." 1879 が出たが、彼をはじめアメリカの新進経済学者は「社会問題」の解決をドイツの歴史学派の社会政策原理に索めた。イリーはこの「制度派経済学派」の重鎮の一人である。彼の「動態的歴史的方法」の基礎は社会改良主義哲学である。彼はジョンズ・ホプキンズ大学(一八八〇)、ウイスカンシン大学(一八九二)、ノース・ウエスタン大学(晩年)の経済学教授。主著はこの「仏独社会主義」のほか「社会主義と社会改良主義」(一八九四年)、「独占とトラスト」(一九〇〇年)、「社会進化の研究」(一九〇六年)、「農村経済の諸要因」(一九四二年)等である。

さらにこの書は、ドイツ社会主義、マルクスとマルクス主義の卓越を次のように述べている。

独乙の新社会主義は、英仏二国における旧社会主義の如く徒らに空論に馳せた荒唐無稽の説を唱へ、児戯的計画を以てその目的を完成せんとするものに比すれば、全然その趣を異にし、深遠なる学理と精細なる研究とにより経済上の原則を講究し、認めて真理を信じ、行いて正理となすにあらざれば、仮令多数労民の為めと雖も、容易にこれを社会に実行せんとせず、叨りに多数に雷同して摯之を頼み、以て衆人の暴を助長するが如きは、学者経世家の採らざる所なり。故に其の説く所は深遠巧妙の原理に富み、社会主義を嫌悪する人にして尚ほ其学理に向て反駁の余地を発見するに苦しましむ、其議論固より首肯し難き点多く、徹頭徹尾之を賞揚すること能わずと雖も、要するに社会主義を以て単に痴人の夢と思惟せずして、研究すべき一派の学問なりと信ずるに至らしめしもの、是れ実に独逸社会主義の功に帰せずんばあらず。宜なり其学理の論拠頗る堅固にして、其勢力の今に至りて尚ほ衰へざる所以のもの、決して偶然にあらざるなり。

加之、独逸の社会主義は、之を第一期の社会主義に比すれば、其目的更に広大なる所あり。第一期の社会主義は、其計画往々一地方に局限し、国の一部或は数部に於ける一小天地の間に社

会主義の実行を夢想せりと雖も、独逸の社会主義者は、其実行の範囲を初めより一地方に局限せず、其性質寧ろ世界的のものたるを感悟せるが故に、可成広大の場所と多数の人とを集めて之を実行せんと努むるもの多し、視るべし、彼等が一国の結合に満足せずして列国の結合を企て、一政府の下に甘ぜずして二三政府の間に其運動を拡げ、国際的労働者の聯合を企図して多数の労民を匡合せるが如き、之を第一期の社会主義に比すれば、其理想の懸隔、其計画の大小、誠に同日の論にあらざるべし。……」(「近世社会主義」一四五—八頁)。

かくて、本書は「カール・マルクスとその主義」について三十六頁にわたって詳述(当時としては)した。すなわち、「マルクスの履歴」と題して、「社会主義の変遷。カール・マルクス。マルクス「レニッシュ・カゼッテ」新聞の主筆となる。マルクス国外に逐はる。マルクス交をエンゲルスと結ぶ。エンゲルス。雑誌「新レニッシエ・ガゼッテ」の終刊。国際労働者同盟興る。マルクス「資本論」を著わす。其死。其性行」を述べ、「その学説」として、「殖産社会に於ける三時期。余剰価格。価格論。使用価格と交換価格。価格算定法。資本家が資本を増殖する所以。資本の定義。其歴史論。資本制度消滅の時期。マルクスと無政府主義。マルクスの資本説に対する駁論。資本と資本家と二者別なり。新社会主義の創立者。」を述べ、最後に「斯くの如く学理を以て社会主義の根拠となし、以て現社会を攻撃し、以て現制度に反対せんとする新社会主義の創立者は、実にカール・マルクス其人を推さざるべからず。」と結んでいる。

本書が中国にマルクスとマルクス主義を伝えた「最も古い文献」といわれるのは、このような内容の「豊富」さを裏付けとしての話である。(註8)

わが国においても、本書が出る以前(一八九九年)に、科学的社会主義に積極的に関説した文献は極めてすくない。雑誌論文を一応除外すれば、明治二十六年(一八九三年)の民友社編「現時之社会主義」と、明治三十年十一月(一八九七年)の田島錦治著「日本現時の社会問題、附近世社会主義論」とあるだけと見ねばなるまい。(註9)

(註8) 中国では、現在も、この書を福井準造の完全な意味での著書とみているという点もあるようである

(註9) 田島錦治は、明治三十年八月に出した「最近経済学」(五七〇頁)に附録として「カール・マークス氏社会主義の要領」をのせている。これは自らことわっているように、A. Naguet, Socialisme Collectiviste et socialisme Libéral. Paris. 1890. の要訳である。「学問的社会主義と感情的社会主義」にわけ、マルクスの経済学説として、「使用価格、交換価格」「剰余価格説」を紹介している。但し本文で該書の著者のとっているのは限界効用説である。

ところで、十九世紀末に現われたこの三文献には少なくも次の二点が共通である。第一にこの三「著者」は、社会主義に対して

主体的実践的見地にたっていないということ、「将来の危機」或は「社会問題の胚胎」を指摘して、予防的に社会主義を紹介しようとしているが、而も社会主義におけるマルクス主義の優位を一応肯定しているという点である。マルクス主義の優位を認める点に関して、福井の書については上に述べたが民友社篇書の場合も、マルクス経済学と「新社会主義」について解説した結びで、「マルクス経済学に訴へて根本的に現時の社会制を攻撃せり、若し其議論をして誤なからしめば、苟も正義の味方を以て任ずるものは現時の社会制と両立する能はざることを感ず可し。吾人素よりマルクスの議論を以て全き真理なりとすること能はず、されど社会主義はマルクスの議論に於て有力の武器を発見せり。新社会主義は労働の窮乏を訴て社会の憫助を乞はんとするに非ず、不正の要求を充さんが為めに革命を促すに非ず、只多数人民の正当なる要求を充さんが為めに、少数人の不正なる要求を撤去す可しと主張するのみ、新社会主義が強烈なる勢力を有する所以の一原因此に在り。マルクスが新社会主義の創立者たる所以また此に在り。」（同書一〇八頁）と述べている。

著述の目的、著者の立場については、福井準造は「自序」で、「日本今日の形勢は、社会問題を陰的の中に胚胎し、貧富の懸隔の弊、亦将に漸く大ならんとする徴候を指示するものの如し、これ決して、経世憂国の士が平然看過すべきにあらず。」だから著述するといっている。田島の「自叙」もほとんど同じことを言っており引用を略するが、三者は大体同じであるといわなければならない。

かような一致は、三者の立場がほぼ同じであるだけではなく、それぞれの種本の著者が同じく改良主義者であったことに基因する。すなわち第二点、この二書は編書といい著書というも、みな実は翻訳書、ないしは内容の殆んど九十何パーセントまで借り物であるからである。民友社編「現時之社会主義」は、序文に正直に William Graham. "Socialism, New and Old." 1890. John Rae. "Contemporay Socialism." 1884 によって解説したことわっているから言うまでもないし、また問題はない。他の二「著書」について、この点やや詳論しよう。

「大学院経済学専攻法学士」として上掲「最近経済学」を八月だした田島は、十一月には「大学院社会主義専攻法学士田島錦治著」として問題の「日本現時之社会問題、附近世社会主義論」（東華堂）をだしたのであるが、この書の「第一編総論」の二十二頁が田島執筆にかかり、爾余の三篇三百七頁が Richard Theodore Ely, "French and German socialism in modern times." N.Y. 1883. の抄訳であるということが、千山万翠楼主人（河上肇）によって看破攻撃された。そのため「僅に五十部を頒ちたるのみにて……絶版に」（参版所載の「絶版復興の辞」）になった。

そして周知のように第一次大戦後のデモクラシーと社会主義の風潮にのって「絶版復興」された際には（註10）「米国リチャード・イリ

ー教授原著、日本河上清先生訳述、日本田島錦治先生補閲、近世社会主義論」（法曹閣書院）と改められたものである。

（註10）小さい事であるが、大正八年五月二十日最初に絶版復興された時には「田島錦治先生編著、近世社会主義論」として旧「自序」を附した。そして同年六月十五日の「参版」にはじめてこの様に著訳者を出し、「自序」を撤去したのである。内容は全く同一紙型である。

福井準造著「近世社会主義」は、前書ほど機械的な翻訳を著書と称したものではない。既に述べたように自らの編別を与てもいる。しかし全巻五百頁の半は、イリーの前掲書の翻訳である。そしてこの部分は河上清訳が抄訳であるのに反しより忠実な訳である。マルクスと科学的社会主義については倍の詳しさである。後半（社会主義及各国社会党の現状は、主として Bliss. "Handbook of Socialism" によったものであるが、これのみとは見られない。福井は巻末に参考書としてこれらの他に、Dawson, Kirkup, H. George, Schäffle, Stuss, Müller, Wallace, Woods, Webb 及び Marx (Capital) らの著書十八冊をあげている。（註11）イギリスの社会主義などはイリーにはないからウッド、ウェッブあたりを参考にしたことは明らかであろうが、これらをどの程度とりいれたものかは、にわかに判定しがたい。

（註11）福井が、この書以前に社会主義文献を読んでいたことは当時の人がかいているところで明らかであろう。そして、明治二十八年七月の「新潮」に「十九世紀の社会主義及其評論」をかいているが、そのなかでは、マルクスにふれ、マルクスが「社会の規制を全く破壊せよ、而して政府をして凡ての生産主位者にせしめよ」といっていると述べ「過激に失す」と評して無理解を示している。

さて当時各新聞、例えば、報知、ジャパン・タイムス、日本新聞、時事、読売、人民新聞、中央新聞等いずれもこの本をほめている。ジャパン・タイムスは次のようにかいている。

"It is a historical and critical study of the different schools of socialism, and its 500 pages contain a great mass o information arranged in excellent form. It forms an excellent introduction to a systematic study of a subject which is bound to deeply affect the thought of future generations in this country. (The Japan Times, July 20 th., 1889).

だが、東京朝日は次のように述べている。

「近来社会主義を言ふ者漸く多く、而して言ふ者大抵社会主義の何たるを知らざる徒なり。近来亦社会主義の事を記するの書相次いで出づ。而して大抵西洋人の著述を生嚙して彼処此処を纂訳したるものなり。固より社会主義に関する自家の意見を発表したるが如きは一箇だもなし。近世社会主義は福井準造氏の著とあるも此れ亦纂訳的のみ。イリーの仏独社会主義か、レエーのコンテンポラリー・ソーシャリズム (John Rae; "Contemporary Socialism," 1884) か、若しくブリッスの社会主義を忠

実に翻訳せば寧ろこの書よりも価値多かるべし、且又欧米諸国における社会党の現状の一篇も多くは五六年前の現状にして今日の現状と異る所あり。されど近日の著述といふは大抵此類なれば、此点より咎むるは寧ろ酷ならんか。唯夫れ社会主義に関する沿革は大抵摘載され、文章も流暢にして読易ければ、社会主義の何たるを知らず又横文字の読めぬ社会主義者共他代議士杯には便利な書といふべし」（「東京朝日」明治三十二年七月二十五日）

と、しんらつな書評をしている。朝日以外に「纂訳的のもの云々」と指摘した新聞はなかったが、こうしたことに敏感なインテリゲンチャにいつまでも気付かれずにいたものとは考えられない。当時未だ多くはなかった社会主義的知識分子がこの書を重視せず、「近世社会主義」を忘却しさった理由の第一はこれであるとみられる。

さらに第二としては、万朝報が指摘した著者の立場の問題である。堺や幸徳のいた万朝報は次のように述べた。

「近時の社会主義に関する著訳中最も完璧に近きが如し。吾人は時節柄我国民の為め深く著者の労を多とす。但だ野村靖子爵の題字の如きは無くもがなと思はる。聞く本書の著者は嚮に伊藤及び板垣の両人に序詞を請ふて謝絶せられたといふ。之を謝絶する者の陋なるは固より言ふを待たずと雖も、之を請う者に至りても識者は必ず之を陋とせん。……」（「万朝報」三十二年十月一日）。

万朝報記者が陋とせんといって、けいべつの情を示したのは、いやしくも社会主義の研究の発表をしようとする者が、要路の大官＝支配階級の元兇に予め膝を屈するとは何事ぞという憤慨である。当時の民主主義的インテリゲンチャはたしかに万朝報と感を同じくしたことであろう。彼らが、著者をみる目はこれによって決定されたとおもわれる。福井の業績がかりに創造的なものであったにしても、彼らはこういう態度の人に対しては敬意を払わなかったであろうことは当然である。

しかし他面からいえば、このことは彼らが著者が本来どういう人物か、どういう階級的立場にあるのかを知らなかったということを物語っているのである。次ぎにこの点を明らかにしよう。

福井準造は、神奈川県下有数の大寄生地主、農工銀工頭取、多額納税者の長男として育った。彼がこの半封建的な搾取者の家庭で、どのような社会矛盾、農民の闘争とかれらを零細させる悲惨な現実を経験したかは明らかでないが、大学教育をうけて郷里に帰り、矛盾に満ちた社会を永年病床からじっとみていた時頑愚な地主とは違って急変する社会の矛盾と「不安」を深刻に感受するようになったであろうことは想像される。彼は明治二十八年、府県会議員選挙有権者が人口の増加に反比例していることから富の少数者への集積と貧民の激増を推知し、貧富の対立は「社会党のごときもの」を発生せしめるおそれがあると憂慮している。とくに二十九年には労働争議が激増し、労働組合期成会の活動が始ま

り、三十年には全国各地の米騒動、小作争議の発生は、ようやく家庭外で活動しはじめた著者をして、これらの「社会問題」の解決策を一層焦慮させたのである。

一般的にいって、プロレタリアが、階級的に成長するに対応して、社会主義と社会主義運動が発展する。自由民権運動が死滅した後、そのブルジョア的民主主義分子や小ブルジョア急進主義分子は激しく動揺し、一部は労働運動＝社会主義に転換を余儀なくされ、他の一部を反動へ、地主的・ブルジョア的・支配階級の陣営へすべりこませる。だがその他の動揺的であり二股的であるブルジョア民主主義分子や小ブルジョア急進主義者は、当時、階級闘争の諸問題を第三者的に「社会問題」としてとらえ、それを解決する政治的社会的役割を自負しようとした。明治三十年四月三日、上野精養軒で発会式をあげた「社会問題研究会」は、かような諸要素の分化過程に現れたものであった。然し当時ブルジョアジーは急速に絶対主義と結びついてブルジョア民主主義を放棄し、プロレタリアートがこれを自己の任務とする客観的諸条件が成熟した段階であって、かような中間的、動揺的なものが主役を演ずる可能性は全くない。社会問題研究会は、かような段階への極めて短い過渡に発生した小さな現象であった。だから、その構成も程なく分化すべき者の集合体であって、最初は片山潜のような社会主義に向うべき分子も、鳩山和夫のようなその反対極に向うべき分子も含めて二百人が集ったのであるが、一致すべからざる各自の目的を抱いて集ったのであるから、結局その最低限の共通目的しかもつことができないので、発起人の示した案では「本会の目的は管理と実際とに拠り社会問題を研究し、漸次に社会の改善を企図するに在り。」とあったが、発会のための集会で早くも「改善を企図する」ことは否決されてしまった。社会問題研究会は発会と同時に自殺する運命にみまわれていたのである。田島錦治はこの会の幹事の一人であった。が他方、福井準造はこれに全然接近していない。福井は開明地主インテリゲンチャの立場であり、自由党＝憲政党に属し、それ自体動揺的でない立場である。彼はその立場に立って「社会問題」の解決策にとりくんだのであるから、社会問題研究会に接近するはずがない。社会問題研究会は殆んど何事もせずに自壊した。

これよりさき、主としてアメリカに学んだインテリゲンチャや労働者が、社会主義の理論と経験をわが国にもたらした。彼らの多くは社会主義を抱懐していたが、わが国の急速に成熟しはじめた労働者階級と労働運動に結びつくことによって自らの世界観と生活をたかめはじめた。これらの小数の労働者、インテリゲンチャは、労働者と勤労人民の解放の武器としての社会主義の共同研究をはじめた。彼らはそうせざるを得なかった。彼らの社会主義は未分化なものであり、未分化な侭に相互にニュアンスを異にしていた。彼らと結びついたわが労働者階級の基幹産業労働者の先進分子は、彼らと共に、彼らに教えられて、社会主義を研究し、

最も正しい社会主義理論をつきとめ、わが国労働者階級の政党のための理論的基礎をつくろうとする必然にあった。他方、自由民権の理想と運動の崩落によって行きづまり、そして一時的な動揺的中間的立場（社会問題研究）から一歩前進した分子の一部もこれとは結びつかざるを得なかった。こうして明治三十一年十月（一八九八年）村井知至、安部磯雄、片山潜、高木正義、河上清、豊崎善之介、岸本能武太、新原俊秀、佐治実然、神田佐一郎、幸徳秋水、金子嘉一らによって「社会主義研究会」が組織され、その周囲に労働者、インテリゲンチヤがあつまりはじめたのである。

だが、ここでもかの福井準造はちがう。彼がこれに加入しないのはいうまでもない。福井はこの頃神奈川県の憲政党機関誌の運営者となっていたが、社会主義研究の盛行につれて、社会主義の理解が「社会問題」を支配階級の立場において「解決」するのに必要だと感ずるようになり、独りで研究を進めたのである。

社会主義研究会は「概則第二条」に目的を規定し、「本会は社会主義の原理と之を日本に応用するの可否を考究するを目的とす」としている。彼らは「社会問題」ではなくて、社会主義を研究することを目的とした。いかなる社会主義原理が正しいか、日本に適用さるべきかを集団的に研究しようとしたのである。彼らの一部は既に一定の社会主義理論をもってはいたが、思想的な対立、闘争を経て固定したものでなく実践的政治的経験に基礎づけられたものでなかった。従って、彼らは新社会主義＝マルクスの科学的社会主義についても、あらかじめ深く理解するところのない人々であった。かくて彼らは社会主義を系統的に研究（註12）することに一致した。

（註12）第一回の集りに「今後の研究の順序については先づ高木（正義）氏より社会主義の系統図を装し、社会主義の歴史的発達を示さるることに一決し、散会す。」（資料日本社会運動史第一巻三〇二頁）

そして彼らは、一月、サンシモン（岸本）、二月、フーリエ（河上）、ルイブラン、プルードン（豊崎）、三月、ラッサール（片山）、四月、マルクス（村井）、五月、ヘンリー・ジョージ（阿部）、六月、「現今の政治社会と社会主義」（幸徳）、七月、「ニュージーランドの土地制度」（阿部）、「北海道における土地制度」（片山）というように研究と啓蒙を進めた。彼らは、この一連の共同研究によって、明かに殆んどすべての人々が空想的社会主義を卒業した。そして、マルクスの社会主義も何程かは理解＝把握するにいたったであろう。村井知至の「カール・マルクスの社会主義」についての報告は、「近世の社会主義を知らんとせば、カール・マークスの社会主義を研究せずんばあらず。彼は社会主義の歴史に於て最も著名なるのみならず、実に彼は近世の科学的社会主義運動の泰斗なりとす」（六合雑誌第二二一号）と評価し、而もマルクス主義思想の「要点」を「価格論、資本論、理想的社会社会進化の歴史」の四つに分けて述べているといわれる。また村井の報告だけでなく主だった人々が河上清の例の翻訳で明らかな

ようにイリーやその他欧米の社会主義文献を読んでいない筈はない。それは孤立した福井準造さえ、この頃には相当の外国書を入手し、その訳稿を進めていたことからもいえよう。しかも、この研究会は、大体において「翻訳的紹介の域を出ず」、その紹介も「国家資本主義と社会主義との区別も明らかでない」、と指摘されるに値するものであったであろうし、空想的社会主義から科学的社会主義への歴史的発展と連関が不明確であったであろうという点も、指摘されうる。だが村井報告の示すようにマルクス主義の優位性を多くの人々が一応認識したであろうことは否定できないと思う。ともかく、村井にしても安部にしても、その社会主義はキリスト教社会主義＝社会改良主義の性格をおび、マルクス主義に対して本質的には縁遠いものであったが、彼らはそれに接することによって片山潜らと共に、単なる研究から実践へと飛躍した。もとより、社会主義研究会は最初から単なる研究会ではなく、日本への適用を研究することを目的としていたが、一年間の成果によって、明治三十三年一月（一九〇〇年）には、「会員一同の賛成により社会主義研究会の名称を社会主義協会と改むることに決し」た。そして「本年仏国パリに開かるべき万国社会主義者の大会に、本会の代表者として村井知至君を出席せしむることを可決した」のである。

こういうわが国社会主義のめまぐるしい発展、実践主体への飛躍的発展期に、福井準造は、自分の立場、自分の目的即ち支配階級的な立場と目的で、彼の研究の成果＝訳稿の編述を発表したわけである。彼は序文ではっきりと「経世憂国の士」にたいして「社会問題・社会主義」に注意を促すという目的の一書を偏したのだといっている。民友社や田島が本質においては支配階級に奉仕するものとして、「社会問題」解決のために社会主義の智識を提供したのに反し、彼は自らの階級にその研究を示しているという差違がある。その差違はさきに指摘したように表現されてはいない。だが、民友社や田島がその立場を中間におき、恐らくは真の役割を自分自身にも短的に肯定していないであろうために、なしえなかったことを、福井は顧慮なくやっているのである。彼は板垣に題辞を求め、伊藤に題辞を求めた。というのは、上掲の万朝報がとりあげた点である。福井にしてみればこれを万朝報の進歩的記者が考えるように「陋なる」こととは考えなかったであろう。寧ろ彼の立場としては当然であり、有効なことと考えたであろう。ただ、日本の絶対主義はビスマークの独乙ともちがって、彼の期待したごときものでなかっただけだ。この間の事情を報知新聞も次のようにバクロしている。

「坊間伝へて曰く伊藤侯は去る人より其著社会主義に題せんことを求められし際、宮中に於て伊藤が社会主義に加担した如く思われては迷惑なりとの辞を以て其の需を排したり。板垣伯は其初め之を諾したれども、後、此の如き書に題するは宮中に対し最も恐れ多き者なることを覚知するに及び、前言は忘れたる

が如く之を辞したりと、果して然るか。」(「報知新聞」明治三十二年七月十五日)

万朝報記者が「請う者に至りても識者は必ず之を陋とせん」と難じたのは、まとはずれの矢を射ているものであり、自分の尺度で他人をはかっているのである。福井は国家社会主義を主張している者ではないから、報知が暗示するように彼の書を国家社会主義の宣伝のために、という程はっきりした結論をもっていたのでもない。彼は社会改良主義の一部の政策に共鳴したのである。彼は随所に社会主義に賛成しがたいと書きいれているし、此の書から数年後の論文にもそれを表明している。彼は民主主義者でもありえなかった。明治三十四年の社会民主党の結社禁止に関連して「現時ノ社会ニ民主主義ヲ実行スルノ適否ハ識者モ容易ニ判ズル能ハザル至難ノ問題ナリ」と書いている。彼はブルジョア自由主義者であったのである。彼がマルクスの科学的社会主義について高い評価を与えたというのは、原著書イリーが学問的にやったことを「纂訳」したがためにひきずられてしたに過ぎないものである、といっても決して過言ではないであろう。彼のインテリ的な側面が彼の立場と全体的な意図に反してそうさせたにすぎないとわたしは思う。これを書きながらわたしは、イリーの「社会主義と社会改良主義」("Socialism and Social Reform." 1894) の序文のなかの次の言葉を思い出した。福井準造も同じようにいっておくとよかったのではなかろうか。

"This book has been written in a conservative spirit. It cannot be understand unless the readers in mind that its standpoint is that of conservation."

これが、わが国の社会主義者が彼を同志として遇せず、今にしては彼をおぼえていない理由の第二である。多くの小ブルジョアインテリゲンチャが、社会主義と社会主義運動に接近し、或は参加した。だが、それら多くのインテリゲンチャが、一定の歴史的条件のもとに、主義をかえ、運動を脱離し、時には敵対物に転化した。これはあまりにも屢々みる歴史の悲劇であった。だが、地主やブルジョア分子が、自己の階級的立場において社会主義を研究し発表したものが、プロレタリアートや勤労人民に理論的武器を与えるのに何程かの役割を演じたとすれば、これはまれにみる歴史の喜劇である。

四

さて、われわれは、最後に理由の第三を明らかにしなければならない。彼は彼の書を刊行した後に、どのような生活＝活動をしたかという点であるが、一言にすれば彼は、当時社会主義者ではなかったように、その後も決して社会主義者にはならなかった。

この点については、ここにわたしのゼミの学生渡辺悦治君が、福井家を訪問し、作成してくれた「福井準造年譜」をかかげわたしの説明にかえる。潤色なきこの経歴こそが、わたしの答うべき

第三の理由の正確な証明を与えるであろう。

福井準造年譜

明治四年九月二二日
神奈川県中郡豊田村大字小嶺に生まる。
福井家は代々庄屋・名主。祖父源兵衛は、足柄県第二区長をなす。父直吉は、明治十二年第一回県会議員に当選、翌十三年副議長に推さる。当時、自由党員として「故中島信行・故石坂昌氏等と共に板垣伯を中心として日夜民選議院設立建白の為め狂奔し、明治十三年遂に相模九郡の有志二万三千五百余人記名調印せる建白書を携へ数名の同志と共に上京し政府元老院へ提出したり」『横浜毎朝新聞』。後、県会議長等を経て二五年自由党より衆議院議員となる。第五議会の解散と共に政界を退き銀行に入り頭取となる。

明治二四年三月
慶応大学英文科卒。
同年「投機の弊害を論ず」を執筆、廿九年四月『新潮』に発表。なお二六年四月・二七年十月『反省雑誌』（後の『中央公論』）に「独語」、「人性の弱点」をそれぞれ発表。

明治二九年九月
神奈川県自由党系の雑誌『新潮』発行さる。新潮社へ入社。
『新潮』創刊以来入社迄の二年間に「十九世期の社会主義及其評論」外五編を、入社後二九年中に六編を投稿。
同年七月、『反省雑誌』に「詩人バイロン」を発表。

明治三十年『新潮』へ投稿二一編。
同年七月、ジャドソン著『十九世紀列国史』を安岡秀夫と共訳、有斐閣より出版。

明治三一年年三月二一日
中村克昌の長女春子と結婚。
六月二六日附『横浜新聞』に「臨時総選挙に対する選挙民の覚悟」を投稿。

明治三二年七月
『近世社会主義』を有斐閣より出す。
「福井準造氏は……卒業以来主として政治経済並に農政社会政策を専攻し造詣極めて浅からず、一時は英米百家の諸書を渉猟し曽て「近世社会主義」の訳著あり」（横浜毎朝新聞）と云われているが卒業後この間は病弱の理由もあり多くは書斎で過す。

明治三三年二月一日
農商務省の嘱託となり神奈川・静岡両県下の工場・職工調査を行う。
一月　『中央公論』に「農民と社会問題」
二月　『憲正政党々報』に「社会問題の本質及起因」
六月　『中央公論』に「工場条例の制定に就て」

六月　『明星』に「詩人ホイチーヤ」

明治三四年五月二二日

「社会民主党宣言」をスクラップし、其処に次の様に附記す。

「尚ホ此項ヲ掲載セシ新聞紙ハ発売ノ禁止ヲ命ゼラレ社会民主党ハ末ダ結党ノ式ヲ上ゲザルニ其筋ヨリ治安防害ノ名ノ下ニ解党ヲ命ゼラレタリ現時ノ社会ニ民主々義ヲ実行スルノ適否ハ識者モ容易ニ判ズル能ハザル至難ノ問題ナリ然レバ這般ノ党派アリテ盛ンニ社会問題ヲ絶叫シ貧富平衡ヲ唱導スルハ現社会ニ対シテ利アルモ害ナキ所然ルニ政府ハ其名称ニ驚キテ其実質如何ヲ究ムルニ暇ナク漫然其解党ヲ命ズルニ至リテハ決シテ寛厚ノ処置ナリト称スベカラズ内務大臣末松君ハ泰西ノ学ニ通暁セリト聞ク然ラバ何ンゾ這般狭量ノ策ヲ採リテ笑ヲ後世ニ貼スノ非ヲ敢スル余甚ダ之ヲ恒ム

卅四年五月廿二日　　記」

明治三十六年

神奈川県農会副会長となる。

明治四一年五月

政友会より立ち衆議院議員となる。

明治四四年八月

第二次西園寺内閣司法大臣秘書官となる。

大正元年十二月

政友会より、再び衆議院議員となる。

大正四年

東京米穀商品取引所重役に就任。

大正六年

家督相続に依り多額納税者。

大正十年

小林毛皮貿易株式会社重役。

大正十四年

日本輸工株式会社重役に就任。

日本倉庫株式会社の取締役に就任。

昭和十二年十二月

郷里にて死去。

五

最後に、上来述べたわたくし自身の設問への答を要約する代りに方法論上の問題について一言して、結語にかえたい。

郭沫若の指摘に関して、わたしはこれまで福井準造とその著書自体についての設問をして、それに答えてきた。しかし、彼の指摘は、少くともわれわれ史学徒にいま一つの問題を提示しようとされているのではないだろうか。というのは、歴史上或る人物を扱う場合にその物が所与の時期に客観的にどのような歴史的役割

を果したかをみず、彼がその後どう変ったか、その後どのような役割を演じたかという点のみからさかのぼって評価を与え、誤って過少評価したり無視したり抹殺したりするような歴史の方法は正しくない方法論だという問題である。それは今日、国際的にとりあげられている問題の一であるから、問題としてはわれわれにもすでに提起ずみの事柄であろう。だが、わが国では従来絶対主義礼讃の人々、特にそういった歴史家に著るしかったこういう方法論が進歩的な史学者にも全然残っていないなどは、いえぬからである。

ところで、中国では、このような主観主義の問題は立派に解決され、克服されているようにおもわれる。早い話が、上にのべた康有為や梁啓超の場合、この地主出身の知識分子は地主ならびにそれと密接に聯繫したブルジョアジーの利益を代表して、立憲君主制を要求し、資本主義の発展をもとめて、満清政府と闘争した社会改良主義者にすぎないのであるが、そして、戊戌変法の失敗後は民主革命に敵対して保皇党にまで顚落した人々であるが、これに対して栄孟源は次のようにいっているのである。

「他們代表者要求転変為資本家的一部分地主和与封建主義有密切聯繫的資産階級、要求実行君主立憲、発展中国資本主義、為此而与清朝政府闘争、在当時是一種進歩的行動、歴史上応該記録下他們的功績。」（栄孟源「俄国一九零五年革命対中国的影響」。傍点H・H）。

中国のこういう歴史方法論からすれば「歴史上応該記録下」に「近世之社会主義」が登場するのも当然である。それは福井の「功績」といわれるには値しないにしても、この「著書」の存在とある種の役割は中国社会主義史上否定すべくもないからである。

ところが、わが国の史書（社会主義史や労働運動史を含めて）には、彼と彼の書物について記述＝評価は皆無だといっても過言ではない。わたしも、上にのべたように「近世社会主義」に対して消極的な評価を与える者ではあるが、その本質規定や評価の如何にかかわらずそれをしないで全く無視したり、忘却し去るのは、正しくないとおもう。それでは、客観的・全面的な歴史記述を完うしえない。けだし、歴史における複雑な闘争の見地を貫きえないものだと評されても仕方がないことになるからである。

郭沫若は、この点もわれわれ日本人に、日本の史学者に、暗示しようとされたのだとわたしは考えたい。

（一九五六年一二月一日）